

2020年7月1日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 阿部 真由美
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 英語自律学習者のための学習デザイン支援
論文題目（英文） Promoting Learning Design for Autonomous English Learners

公開審査会

実施年月日・時間 2020年6月19日・13:00-14:00
実施場所 Zoomによるオンライン開催

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	向後 千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	保崎 則雄	Ph. D.（教育コミュニケーション学）	オハイオ州立大学	教育コミュニケーション学
副査	早稲田大学・教授	井上 典之	Ph. D.（教育心理学）	コロンビア大学	教育心理学

論文審査委員会は、阿部真由美氏による博士学位論文「英語自律学習者のための学習デザイン支援」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 質問：指標が多くわかりにくい。特に「ニーズ合致度」を詳しく説明してほしい。
回答：一般の学習者は学習方法が自分に合っているかについてあまり意識していない。学習プランが個別ニーズに合っていることが、自律学習の質と量を確保するために重要だと考えられる。
- 1.2 質問：「拡散的な好奇心」について詳しく説明してほしい。
回答：幅広い情報に触れることを求める知的な好奇心が拡散的な好奇心である。
- 1.3 質問：「英語自律学習者のための」と掲げられているのは、英語学習という領域固有性があるからなのではないか。

- 回答：領域固有性と他領域との共通性の両方が存在する。その点について加筆する。
- 1.4 質問：英語学習の目的は決まっているので、その目的に対する学習効果を論じるべきではないか。効果が測定されているのは研究2のみである。
- 回答：学習効果は重要である。一方で、英語自律学習者にとっては学習継続の困難さも課題のひとつであり、本研究ではそこに焦点を当てた。
- 1.5 質問：ニーズ合致度の重要性から好みの構造、拡散的好奇心へと実践的な研究になっているが、本研究の状況依存性についてはどう考えるか。
- 回答：2.1節のケーススタディと3.1節、3.2節の実践調査は特定の大学学部で実施したため状況依存も考えられる。しかし、2.2節と4.2節で幅広い層を対象にオンライン調査を行い、同じ傾向の結果となった。従って、少なくとも日本国内においては一般的な結果であると言える。
- 1.6 質問：今後の課題として拡散的好奇心を満たす学習方法や教材の開発とあるが、実際にどのようにするのか。
- 回答：コンテンツベースの教材や学習方法が拡散的好奇心を満たすと考えられる。学校教育では CLIL や EMI が広がっている。自律学習でもそのような選択肢があるとよい。
- 1.7 コメント：テクノロジーの進化は速く、学習の選択肢が数多く存在するときに、ニーズやゴールを明確化して学習を選択する自己調整力は大事である。それを授業に埋め込んでいけるとよいのではないか。
- 1.8 コメント：日本人の気質は戦後それほど変わらず、西洋の理論はそのまま日本に当てはめられない。日本の特殊性を踏まえるべきである。
- 1.9 コメント：拡散的好奇心を満たす学習だけでは英語習得に限界がある。しかし、文化の壁を超えたいという拡散的好奇心を満たすようなトピックを英語教育に取り入れるとよいのではないか。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
- 2.1.1 日本の英語教育の特殊性を踏まえて論じる。
 - 2.1.2 第二言語習得の領域固有性、および他領域への一般化の可能性を述べる。
 - 2.1.3 学習効果についても言及する。
 - 2.1.4 本論文の成果を授業に生かす視点を加筆する。
 - 2.1.5 大学生を成人英語学習者として対象に含める理由を明確にする。
 - 2.1.6 質的分析のローデータを掲載する。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
- 2.2.1 日本の英語教育の特殊性について、「1.1 研究の背景」に加筆した。
 - 2.2.2 第二言語習得の領域固有性について、「1.2 先行研究」に加筆した。また、他領域への一般化の可能性について、「5.1 研究の成果」に加筆した。

- 2.2.3 学習効果に関する調査は今後の課題である旨を「5.2 今後の課題」に加筆した。
- 2.2.4 本論文の成果を授業に適用する可能性について「5.1 研究の成果」に加筆した。
- 2.2.5 大学生を対象に含める理由を「1.1 研究の背景」に先行文献を引用し加筆した。
- 2.2.6 質的調査のローデータは請求があれば開示可能である旨を「付記」に加筆した。

3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、英語自律学習者を対象に学習デザイン支援の方法を検討することを目的としている。具体的には、英語自律学習者の学習デザインの実態を把握し、学習デザインの効果的な支援方法を明らかにすることを目的として設定している。グローバル化が進む現代において、日本人の英語スキルの向上は喫緊の課題である。英語学習者の自律学習の支援は重要なテーマであり、本研究の目的はそれに合致する妥当なものと判断できる。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究では、第二言語習得とインストラクショナルデザインの理論やモデルを背景に、英語自律学習者の実態調査を行った上で支援方法を設計・実践し、学習プランニングと学習行動、学習意欲に関するデータを取って検討している。データ収集方法は明確に記述され、先行研究の手続きと知見に従っている。また、データ分析については、先行研究で妥当とされる分析手法で解析されている。これらのことから、本研究の方法論は妥当なものであると判断できる。

なお、本論文の2.2節、4.2節のオンライン調査は、日常的な範囲を超えた質問はなく、回答は無記名で任意だった。2.1節、3.1節、3.2節は、調査を実施した大学において研究の許諾を得ており、4.1節の予備調査としてのインタビュー調査も含め、参加者に対して調査内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、英語自律学習者の個別ニーズに合わせた学習デザインの効果が明確な成果としてまとめられている。また、学習デザインの支援方法として、個別ニーズとの合致度向上に加え、学習者の好みや学習環境への配慮が学習行動を促進する点が明示されている。これらの知見は、英語自律学習や学習デザインの先行研究と照らし合わせても、新たな示唆として妥当なものであると判断できる。

3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 第二言語習得において授業外の自主的な学習が重要であることは長年認識されてきた。しかし、英語自律学習者の行動や意識、およびその支援方法に関する研究は不十分であった。これに対して、本論文では英語自律学習者の学習デザインに着目し、支援方法についての知見を提示した。これは従来にはない新たな視点であり、本研究の独創性として評価できる。

3.4.2 インストラクショナルデザインは教授者が教材や授業をデザインする視点で発展した学問である。一方で、近年では学習者中心の学びの重要性が主張され、今後は個別の学習者に焦点を当てた学習デザインの研究も期待される。このよう

な状況において、本論文は、学習者の学習デザインに関して調査・実践研究を行い、個別ニーズに合わせた学習デザインの方法および支援についての知見を示した。これらの点は、従来にはない新たな視点であり、本研究の新規性として評価できる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本論文は、英語自律学習における学習デザインという観点で、学習者自身の個別ニーズに関するメタ認知的知識の向上と学習プランニングへの適用について知見を提供しており、この点において学術的意義があると考えられる。

3.5.2 本論文は、英語自律学習の質と量の向上に対して貢献できる具体的な知見を提供しており、この点において社会的意義があると考えられる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 生涯学習および自律学習の促進は人間科学の重要なテーマの一つである。本論文では、成人英語学習者の自律学習の質と量の向上について新たな知見を提示しており、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

3.6.2 本論文では、成人英語学習者の自律学習における意識を調査し、支援の実践調査を行った上で支援方法について新たな知見が示されている。人間を軸とした実践的な研究という点で、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

Abe, M. (2017). Integrating metacognitive knowledge for planning in self-directed language learning. *Learner Development Journal*, 1(1), 62-77.

阿部真由美, 向後千春 (2018) 英語自律学習者の学習リソース選択根拠の調査および支援の検討. 日本教育工学会論文誌 42(Suppl.) 17-20

阿部真由美, 向後千春 (2019) 大学授業における英語学習者の個別ニーズに合わせた学習デザイン指導とその効果. 日本教育工学会論文誌 43(3) 231-238

阿部真由美, 向後千春 (印刷中) 英語自律学習者の学習方法に対する「好み」の構造と傾向および学習行動への影響. 教育メディア研究

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上